

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語解説〉 「オーストラリアの客家移民」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009532

〈日本語解説〉「オーストラリアの客家移民」

本稿の作者・羅可群は、オーストラリア客家研究の第一人者であり、2008年に『澳大利亜客家（邦訳：オーストラリアの客家）』を上梓している。また、現在80歳を超える高齢であるにもかかわらず、ほぼ毎年オーストラリアへ渡航し、メルボルンの客家団体と連絡をとって調査を進めている。本稿は、『澳大利亜客家』に掲載されたデータに基づいているが、さらに出版後にメルボルンで収集したデータも加味し、1本の論文としてまとめている。その意味で、『澳大利亜客家』をまだ読んでいない研究者だけでなく、すでに読んだ研究者にとっても貴重な「続編」となっているといえよう。本稿で提示されている概要は以下の通りである。

- オーストラリアへ華人が大量に移入するようになったのは、19世紀半ばのことである。その要因となったのが、世界的なブームとなったゴールドラッシュであった。特に広東省、福建省の出身者がオーストラリアへと渡ったが、墓地調査から、そのうち最も早くに移民した客家は広東省の四邑（台山、新会、開平、恩平）の出身であると想定できる。これらの地域は、19世紀半ばに「土客械闘」（広府人と客家の間の争い）があったところで知られている。
- 19世紀後半より華人がたびたび排斥され、20世紀に入ってからには白豪政策の影響もあり華人の移住が制限されてきた。しかし、1972年にオーストラリアと中国が国境を結び、その後オーストラリア政府が多文化政策を採択すると、華人の移住が再び増加した。そのなかに客家が含まれていた。この時に移住した客家は、中国南部の出身者に限定されることはなく、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、インドネシア、東ティモール、台湾などさまざまであった。
- 1980年代以降、オーストラリアでは華人団体が次々と成立するようになった。メルボルンでは維省客属崇正会、維省東帝汶華裔老年会、墨爾本客家聯誼会、シドニーでは紐省客属聯誼会、紐省東帝汶華人聯誼会、悉尼客属崇正会、澳州客属協会、ダーウィンでは北澳客属公会などが結成された。そのうち本稿は、メルボルンの客家団体に焦点を当てて紹介している。維省客属崇正会は、1989年に成立し、東南アジア各国、モーリシャス、中国本土や香港、マカオ、台湾などあらゆる国／地域の出身者が加わっている。他方で、維省東帝汶華裔老年会は東ティモール（東帝汶）出身の華人による集まりとなっている。東ティモールの華人は約98%が客家であるため、この団体は実質上、客家団体となっている。1975年の動乱が原因で東ティモールの客家が徐々に移住し、1997年にこの会が成立した。他にも2002年には台湾出身の客家を中心とする墨爾本客家聯誼会が成立した。
- これらの団体は、年会、誕生会、年中行事の祭りなど、さまざまなイベントを開催している。そうすることで、客家、もしくは故郷を同じくする華人のつながりを、オー

ストラリアという異国の地で強めているのである。また、オーストラリアでは、華人を対象とする各種の新聞、雑誌が刊行されている。例えば、『漢声』という雑誌は、1979年にベトナムから移住した中国系難民によって創刊された。

本稿は、オーストラリア客家の歴史および団体の概況を述べたものであるが、同時に非客家系の華人についての言及もしている。序論で示したように、オーストラリアの華人社会において客家は少数派である。それだけに、モーリシャスやタヒチとは異なり、「客家（客属）」を銘打った団体が成立するようになっている。オーストラリアにおける客家団体の歴史は、まだ40年も経っておらず比較的新しい。そのなかで、東南アジア諸国、特に紛争や戦争が原因で移住してきたベトナム、東ティモールの客家が相対的に多いことは注目に値する。本書では系統的に述べていないが、ゴールドラッシュが移民の契機となった歴史、および東南アジアからの客家難民を多く抱えている状況は、アメリカ合衆国とも共通している。

(河合洋尚)